

# まちの話題

## チャリティーライブで観客が一つに ～難病の少年のため「MOBO」が一役

今、県外でも人気のバンド「ARTS」の井上良久さんと大茂盛義さん2人でつくるユニット「MOBO」が7月16日、緑町の「AVシエルター」でチャリティーライブを行いました。これは、海外での心臓移植を目指す福岡県の難病の少年を救おうと、少年と同じ病気を持つ鹿児島市の女子高生の働きかけで行われたものです。

会場の入口には募金箱が置かれ、入場料の代わりに1,000円以上募金した約80人がライブに参加。演奏が始まると観客同士が手をつないだり手拍子が起きたりと、会場は温かい雰囲気になりました。井上さんは「こんなに多くの人が呼びかけに応じてくれてとても感謝。僕たちはいいファンに恵まれている」と語ってくれました。



## カッターのごぎり、楽しく教えてくれました ～鹿水高カッター部員を講師に海洋教室を開催

青少年講座『海洋教室』が6月25日、枕崎港内などで開催され、16名の親子連れが参加しました。

鹿児島水産高等学校カッター部（山神正文監督）の指導のもと、カッター体験航海や船舶で用いられるロープの結び方、網の編み方などを学習。始めは慣れないオールさばきに苦労していた参加者たちも、カッター部員たちの指導で少しずつコツを覚え、かけ声をかけ合いながらこげるようになりました。

また、港内に停泊中の船舶を見ながら、山神監督から船に書かれてある記号の意味や船の構造の説明を受けるなど、楽しく、充実した時間を過ごしました。



## あこがれのプロ野球公式戦でストライク ～立神野球スポーツ少年団の積山君が始球式

7月10日に県立鴨池球場で開催された、プロ野球の横浜ベイスターズとヤクルトスワローズの公式戦で、立神野球スポーツ少年団のキャプテン積山昇平君が、始球式で見事な投球をみせました。これは、薩摩酒造（株）が地元枕崎市の野球スポーツ少年団を招待したもので、5チーム約100名が観戦しました。

積山君は「緊張したけど、ボールがキャッチャーミットに入った瞬間、感激でした」と話していました。



## ピチピチ釣れたての魚を味わって ～「若潮クラブ」が妙見の里に、たくさんの魚を贈呈

釣りの同好会「若潮クラブ」（楠安富会長）が7月24日、妙見の里の入所者たちに新鮮な魚をプレゼントしました。この取組みは、昭和49年からほぼ毎年続けられており、今回でちょうど30回目となります。

メンバー16人が前日から釣った魚は、真鯛やシブ鯛など全部でなんと50%。これらをすべてメンバー自らさばき、刺身にして入所者の方に振舞っていました。

ちなみに、この日の最高記録は田畑敏隆さん（立神本町）で、石鯛など10%も釣り上げたそうです。



## サッカーU-13日本代表で 世界一!! (13歳以下)

## 鮫島晃太君 (寿町)

6月に韓国で行われたMBC国際ユーストーナメント大会において、U-13日本ユース選抜チームが決勝で南アフリカを2-0で破り、見事世界1に輝きました。この代表チームの中でミッドフィルダーとして全試合に出場し、優勝に貢献したのが鮫島君です。鮫島君がサッカーを始めたのは妙見保育園のときから。桜山小学校へ進むと「自分で工夫をして独創的なプレーをしていた」（白澤芳輝桜山サッカースポーツ少年団監督談）というように、メキメキと頭角を現してきました。そして県選抜にも選ばれ、埼玉で開催された国際ジュニア大会に出場。外国人選手の激しい当たりにも負けずにゴールを決めたことを評価され、九州トレセン（※）に呼ばれるようになりました。

その後、さらなるレベルアップを求め、日置市の育英館中学校に進学。毎日、寿町の実家からバスで通学しています。九州トレセンの中で13歳以下の有望選手が、鮫島君を含め4人いるということでした。この内2人が今回の国際ユーストーナメント大会に選ばれて出場したということ。鮫島君は、今回の国際大会を振り返って「外国人選手は、日本人と違って足も速い。当たりも強い。なかなか手強かったです」と話してくれました。

一方、母親の睦子さんは、「サッカーは格闘技のように激しいプレーをするので、強いところと当たるのが怪我をしないか心配。もっと大きくなって強い体になってほしい」と晃太君の体を気遣っていました。サッカー界の未来のスターを目指し、これからも頑張ってください。

※ 日本サッカーの強化、発展のため、将来日本代表選手となる優秀な素材を発掘し、良い環境、良い指導を与えること。



6月28日、市役所に優勝報告を行いました。左上：睦子さん 右上：白澤さん

## まちの話題



## 「平和な世界を築いて」と戦争体験語る ～立神中学校で平和学習講演授業

平和学習講演が7月15日、立神中学校で行われ同中学校2年生が平和の大切さを学びました。

講演は、枕崎大空襲を経験された新屋敷春嘉さん（泉町）が当時の悲惨さを風化させまいと、同中学校に話を持ちかけ実施。ちょうど60年前、昭和20年春から夏にかけての3か月の間に起こった空襲で、新屋敷さんの身近な人たちが次々と亡くなっていく悲惨な様子を、詳しく語られました。生徒たちは新屋敷さんの話に熱心に耳を傾け、講演が終わった後「身近な人が死んでいったときどのような気持ちでしたか」などと質問。「戦争は常識では考えられない状態になる。その時はとにかく呆然としていた」と話していました。